

関東大震災体験記

関東大震災体験記



はじめに

今から六十四年前の大正十二年九月一日午前十一時五十八分に突然、発生した関東大地震のため、大勢の方々がその尊い生命を奪われ、たくさんの家屋が全半壊しこの時発生した火災がこれに拍車をかけ、人々は何らなすすべもなく翻弄されてしまいました。

綾瀬市におきましても当時、人口六〇六八人、戸数九二四の内、死者十六名負傷者五八名、全壊家屋四六三戸、半壊家屋二七三戸と信じられぬ大打撃を受けてしまったわけであります。

あれから六十四年の歳月が流れ、当時を知る人も非常に少なくなって来ている昨今です。さて、このたび綾瀬市では今後来るといわれている大地震に対処すべく日夜、職員をはじめ関係機関ともども努力しているところでありますがその一つとしてこのたび、関東大地震を体験された四二名の皆様の体験記を、この小冊子にまとめさせていただきました。すこしでも市民の皆様のお役に立てれば幸いと存じます。

また、この冊子の発行に際し資料提供をはじめ御協力を賜りました方々に厚く御礼申しあげます。

昭和六十二年九月一日

綾瀬市長 鈴木 進

一週間の竹やぶ生活

流言 飛語

コンクリートの橋が壊れてしまった

国内から、外国からも救援物資が

目の前で生徒が校舎の下敷に

ザーという音と大きな横揺れ

横井戸の水が、ドツと出てきた

母親が丹精して作った紫蘇の葉が役にたった

土ぼこりで周囲が何も見えなかった

おばあさんを先に助けるかそれとも馬が先か

おばあさんが火の始末をしてくれた

大きな揺れで転がされ

その火を消せとさけんだ祖父

目の前に女の人が落ちてきた

神社の石段が燈ろうが崩れた

横浜にある親類では一家全員亡くなっていた

水車小屋が壊れてしまった

のこぎり一つで人命救助

上土棚	上土棚	上土棚	上土棚	吉岡	早川	早川	早川	早川	早川	早川	早川	早川							
新倉喜作	細谷英雄	浅田太郎	岡本旭	橋本惟恭	橋本峰雄	志澤定八	鶴野精一	加藤徳次	加藤一由	小泉勲司	内藤正義	内藤常吉	鈴木若雄	早川明能	杉本竹四郎	森山愿	杉本三郎		
44	44	43	42	41	40	39	38	36	36	34	33	32	31	30	29	29	28		

余震の方が怖い
 地盤が固かったので家はつぶれなかった
 火を消すために逃げ遅れたお手伝いさん
 何事が起きてても常に冷静に対処
 大黒柱に身を寄せて
 慌てて庭に飛び出したが
 妹と山茶花の木に身を寄せて
 ひばの木に捕まって

大上	寺尾南	寺尾本町	寺尾釜田	寺尾中	寺尾台	上土棚	上土棚
増田	橘川	早川	笠間	橘川	近藤	峰尾	鈴木
虎	敏	角治	ウメ	勇	俊平	清隆	照作
53	52	52	51	50	48	47	44

小学校が壊れてしまった

山田イチ

関東大震災を体験したのは、尋常小学校三年生の時で、当時は、地震というものに関心
がなかったせいも、何が何だかわからないうちに、台所より外に、飛び出していた。外に
出たのはいいが、立っていられず、四つんばいになっていた。揺れが終って、はじめて地
震の怖さが込み上げてきた。自宅は、倒れなかったが、ひさしが、地面に着くほど傾いた。
近所の製糸工場が全壊し、綾瀬小学校も壊れた。幸い、火災はなかったが、余震がしばら
く続き怖かったので、一ヶ月ほど、家族で、バラックに住んでいたが、水、食糧に不自由
はしなかった。

戒厳令がひかれた

田中仁作

家族三人で、昼食をとっていた時でした。突然に波が寄せて来る様な強い揺れ、弱い揺
れが来た。私は、外にやっとの思いで出て、庭の木にかじりついた。母と女房も、外に出

るのが大変だったようだ。木にかじりつきながら、まわりの様子を見てみると、母家が、前後に、二、三回揺れたかと思うと、のめる様に倒れてしまった。近所では、おばあさんが建物の下敷になったが、幸い怪我はなかった。二、三日すると在日外国人騒ぎが起り大変であった。大人達は、陸稲畑に、竹やりを持ち込み忍んでいたり、部落の要所、要所を固めていた。少し遅れて、戒厳令がひかれ軍隊が出て巡回をしていた。

地震で、家は倒れたけれど、すぐに廃材を利用した、バラックを建て、仮の住まいとした。食べ物については、農家でしたので、さして困らなかつた。

今後、いろいろな災害が来ると思うが、一つには人命の救助を最優先すること、又、地震の際は、火災を絶対に出さないことが教訓として残りました。

ひっくりかえった赤飯のなべ

比叡川 邦 庄

家の中で地震にあった時は、出口を確保すること、又、地震に限らず太平洋戦争の時の空襲による火災を経験して、密集地の避難方法を考えることが必要だと思ふ。

あの時は、自宅の庭で、近所の仲間と遊んでいた。その時「ガタガタ」と地面が揺れて、いつの間にか、倒されていて起きあがることができなかつた。よく父親に「最初に来る揺

れの後に、その揺れの三倍くらい強い揺れが来る。」と聞かされていた。

自宅は傾いていただけで倒れなかった。地割れは、あまりなかったように思う。当時の家は、今の様にコンクリートの基礎の上に家を造るのではなく、柱の下に玉石を置いただけの粗末なものであった。この地震から半月ほどだった十五日の夜中に、大きな余震があり、朝起きて回りを見ると、前の晩に仕込んでおいた赤飯のなべがひっくりかえっていた。おかしなことですが、余震の揺れの怖かったことより、赤飯のなべがひっくりかえって中味が飛び出してがっかりした時の記憶が鮮明に残っている。

「向う三軒両隣」の精神

多田正雄

自宅の納屋で、腰をおろして友人と家の使用人、三人で雑談をしていた。そのころの農家は、ほとんど十一時ごろが昼食で、すでにすませていた。突然、「ガタガタ」と来たので外に出ようと歩いたが、二、三間歩くのが、やっとなであった。やむをえず、はいずって外に出たとたん、納屋が、つぶれてしまった。桜の木に捕まりながら、回りを見ると、地に埋めてある、肥だめ用の桶の中味が揺れて吹きこぼれているのが見えた。

当時の新道部落には、二十軒ほどの戸数であったが、その内、全壊となったのは、約半

数、残りもほとんど全壊に近かった。倒れた建物は、一様に表に倒れているのが多かった。近所では、女性一人が、倒れた家の、はりに、はさまれてしまったが、皆で協力して助け出した。

二、三日すると、在日外国人騒ぎがあり、大人達は、竹やりを用意し、竹やぶに集まっていた。食べ物は、隣近所で分けあって、急場をしのいだ。昔は、隣近所、困っている時は、助けあったものです。

不思議な入道雲

吉野 ハツ

尋常小学校六年生の時でした。学校の帰り道、早川の天満宮の坂の手前を歩いていたら、突然、大きな上下の揺れが来て、やっこの思いで、近くの知りあいの家の竹やぶに避難させて頂いた。すこし経ってからわかったのですが、通学路の途中の両側に、がけがあり、このがけが完全に崩れてしまったのです。帰り時間を、あとすこしでも早めていたら、生き埋めになっていたかと思うと、今でも、ぞっとします。

地震の来る少し前ですが、近くの山が、ざわざわと揺れているのを感じた。周囲が桑の木だったので、それにつかまり、あちこち振られながら歩いた。

母は、地震の前に、普段と違う大きな入道雲が出ているのを見て「何か、おきなければよいが」と言っていたのが、今でも記憶に残っています。

地震の時は、竹やぶに限る

比叡川 熊太郎

私は、その時自宅の土間で、おもちゃを作っていました。が、「ドドド……」という地鳴りの様な感じで、上下に揺れたので、急いで、庭に飛び出した。けれど、小供だったので庭に出て立っていられず転がっていたのを覚えています。私の家も、近所の家も、すぐに倒れてしまった。この地震で近所で、三、四人の方が亡くなられた。又、市の体育館の建っているあたりは地震で大きな地割れができたのを記憶している。

大人達が平素「地震の時は竹やぶに入るとよい」と言っていたのを聞いていたが、結局三日間竹やぶ暮らしを強いられるはめとなった。布団、衣類は、つぶれた家の中に埋もれてしまっ、取り出すのに苦労した。幸い、九月で竹やぶで生活するのをもさして苦労はありませんでした。井戸が汚染されてしまい飲料水の確保が大変でした。



翌、十三年一月十五日にも、地震があり、この時、前の地震で倒れかかっていた家は、ほとんどつぶれてしまった。今日の家は、屋根が経量な材料で葺かれていて、柱の数も比較的多く使われているが、当時の家は、柱の数が家の大きさに比べ少なく、その上、屋根材として、麦わらを使用しているため、これが非常に重いので、簡単につぶれてしまったのでしよう。

又、在日外国人騒ぎがあり、人々ほとんどないデマにまどわされて数日間、右往左往しました。

軽口をたたいていたら……

鈴木 敏 雄

鶴島の方へ泳ぎに行く途中、今の鈴木市長宅付近に酒屋があり、その酒屋の前で、突然、地面が上下に揺れだした。その時、一緒にいた仲間に、「これは土竜のかいのが、この下に潜っているんだろう」と冗談口をたたいていると、こんどは横に大きく揺れだして、立っていられず倒れてしまった。何が何だかわからないうちに道路の上を転がされて、水を浴びる様に泥まみれになってしまった。見ると、酒屋の、六尺もある板べいが倒れてしまっていたが、幸いに誰もつぶされずにすんだ。この周りの家々は、ほとんどが土壁で、

できていたため、土壁が崩れ、その土埃が、黒煙に見え火災のようでありました。

昔の家は、みな玉石の上に柱を置いただけなので、地面が大きく揺れると玉石が、ずれて、容易に家は傾き、崩れてしまった。又、何よりも小供心に怖かったのは、在日外国人の暴動騒ぎがあり、「こっちにも来る」と言って、大人達が、竹やりを作って村の要所、要所に立って警戒をしたり、夜中に三、四回半鐘が鳴ったりで、すっかりデマにまどわされてしまった。

私は、普段から、地震が来たら火を止めて、出口を確保することを心掛けています。

あゝ沈んでいく

内 田 進

今の、スポーツセンターの東側あたりに、私の家がありました。家の中で、腰をかけている時でした。地鳴りが「ドロドロ」して、家が沈んでいく様に倒壊したのを覚えている。外に飛び出したところ、南の方から、地面が大きく揺れて、波の様なものが、押し寄せて来るのが見えた。立木は波を寄せる様に、ザア・ザア音がした。竹やぶに逃げこんで、竹に捕まり立っていたが、恐くなり、横になったら、上下、左右にたたきつけられた。私の姉は、桑の葉を摘みに、蓼川（現在の基地内）にある畑まで行って安否を気遣っていた。

たが、幸い、無事でありました。

この年の四月の終りにも、南の方から大きな地鳴りが聞こえて、かなり揺れたが、その後、今回の大地震まで、何もなかった様に思います。

食糧には、さほど困らず、土蔵の中に入れておいた玄米をついて食べた。井戸は壊れず残っていたので、水には困ったということはありませんでした。

大地震は五十年、六十年周期でくると

比叡川 彦 一

大正十二年九月の関東大震災の時、庭で昼風呂に入っていました。この地震で、風呂桶とともに倒されて転がってしまった。自分の家には、五棟の建物がありました。が、それらが全部倒されてしまい、その中に妹と母が、下敷になってしまいました。ようやくのことで、風呂桶から出て、手拭いを腰にまわして倒れた家の中を探したところ、幸い、二人とも、はりとはりの間にいて、怪我もなく助け出すことが出来た。その時、たまたま家に来ていた当時の綾瀬小学校の校長先生の奥さんが、倒壊した家の下敷となってしまう中から「助けて」という声がしたので、それに答えて、倒壊した家の二階部分中に入り、その床を壊し、知らせを聞いて、遅れて来た夫である校長先生と一緒に助け出した。

校長先生が遅れたのは、やはりこの地震で学校の児童が校舎の下敷となつてしまい、この救出をしていたためと後でわかった。当時の、この辺の人々は、地震というものは、ほんの一地域だけしか来ないものと信じていた様です。

又、私の祖父は、どこで聞いたのか又、文献でも見たのか、日頃「大地震は、五十年、六十年周期で来るらしい。」と言っていた。

たまの休みが地獄と化した

武藤政雄

農家は、当時、一日を休みとしていた習慣があり、ちょうど休みの日であった。

私は本蓼川に住んでいて昼食をとり家の中で新聞を読んでいた。突然、グラグラときたので外に飛び出た。口に出せないほどあの地震はものすごく土蔵の土壁がすべて崩れ落ちて周囲は真っ暗になり、そのうち太陽の光が土ぼこりの中に溶けこんで、黄色に見えた。まるでこの世の地獄をみた思いであった。幸い家族の者も無事で母家は傾いただけですんだ。二、三日外で暮らしたが母家のいたみもさほどでなかったので、もともとおり母家に入った。しばらくして静岡の方から職人を呼び、傷んだ箇所を補修した。

よく大地震の時に発生する地割れにはさまれて、たくさんの人が死ぬのではないかと聞

くが、この辺ではその様なことはなかった。ただ小さい地割れに足をとられた人はいら
しい。

私のところでは横浜に何軒か親類があり、地震の日より三日たってから心配なので自転
車に乗り様子をみにいった。途中で、かわらの下敷となって亡くなっていた人を見た。親
類に着いたところ、長女一人を残し家族がみな亡くなっていた。もう一軒の親類では「火
災から川の中にのがれて全員助かった」といつていた。

あの大地震を経験して、事前の教育訓練が非常に大切であることがわかったと同時に、
昔は、自分のことは自分でやるといふ精神があったが、今はそれが無い様に思う。又、今
は水は水道、食糧は豊富にあるが、水道管が破れついたらどうするのか、食糧の買い置
きは、いろいろと不便になるが、やはり、食糧については二、三日分をいつも買い置きし
ておき、水については、井戸水等の自然水を有効に使える様にしておくべきでしょう。

三階建の物置が倒れず、平屋建の母家が……

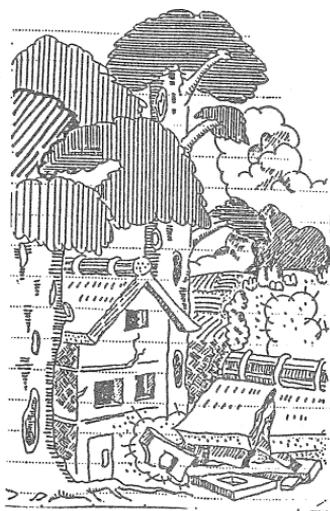
柴 田 ヨ シ

震災にあったのは、十五、六才の頃で、本蓼川（終末処理場付近）に住んでいた時のこ
とでした。

地震の来る前、庭にいましたが、庭で何をしていたかは記憶がさだかではありません。家族の者も家の中にはいませんでした。突然、大きな揺れが来て、立ってはいられず、転がってしまいました。この世の中がどうにかなくなってしまった様であった。私の家は大きな農家であって、母家をはじめいくつかの建物があったが、不思議なことに、三階建の物置と、小さな味噌蔵を残し、すべて倒れてしまいました。三階建の物置は、周囲約五メートルの大きなけやきの下にあり、木の根があちらこちらにはって地盤が強かったからではなかったのでしょうか。又、本蓼川では、

私の家をはじめほとんどの家は、北側に倒れていた。近所では、母子が倒れた家の下敷となり、子供は無事であったが、母親は亡くなられてしまった。

夕方頃から、横浜の方向に煙がものすごく上がり、大山の噴火が始まった様であった。住まいは、物置を利用し、食糧、水にも困らなかった。



川の堰の周囲に発生した大波

齊藤 眞一

「ドーン」という大きな音がしたと思ったら、家が上下に、そして次には横に揺れ、三階建てであった家の土壁が崩れ落ちて来た。外にある牛舎では、牛が地震で立っていられず転がっていた。私が、今の基地正門付近にあった綾北分校から帰って来て、昼食をすませた直後の出来事であった。私は外に出てもちの木につかまっていた。母家は倒れはしなかったが、基礎である玉石が外れたため家はゆがんでしまい応急的な修復をした。余震が続いていたので、庭に地割れが出来ると怖いので、地面に、はしごをひきさらに畳をその上にひき、蚊帳を吊ってしばらく暮した。

その後、上級生に聞いた話ですが、近くの川で、水浴びをしている最中に地震に遭遇し足をとられ、おぼれてしまい息が出来ず苦しかったそうです。又、この傍に堰があり、急に大波がその堰にあたって不気味であったそうです。

関東大震災の唄

守 矢 松 三

その日は、午前中大雨で昼ごろから、からりと晴れて、大変暑かった。

私は、当時、尋常高等小学校一年生（現在の中学一年生くらい）で、学校から帰って家の中に入り、座敷に上がったとたん、「ドロ、ドロ」という音とともに、上下動とも横揺れともつかない激しい揺れが来て、これは大変だと思いい外に飛び出て、さつまぐらの上に乗倒れた。父親は、隣の家に用事で、でかけている時に地震に遭遇、家に帰ろうとしたが、転がされて歩くことが出来なかった。母親と妹は昼食の準備をしていて台所にいたので、家の下敷となり、おばあさんは、座敷で寝ていたのと同じ様に下敷になってしまった。父親と私で、下敷になっていた家族を助け出した。幸い、皆無傷であった。隣の家は、本震では倒れず、余震で五分後には倒されてしまった。さらにその隣の家では、母子が家の柱の下敷となり、その夫が一人で、そこを使って助け出そうとしていたが、一人ではとても無理で、私が手助けをして、やっと救出した。母親の方は胸を強く打つたらしく当分の間家にこもりぶらぶらされていた様です。又、子の社の下は、峰が、南側に続いていて、その下に、百五十メートル位のトンネルがあった。通学路として、このトンネルを利用していましたが、ここがつぶれてしまった。あと十分、学校から帰って来るのが遅ければ生き埋めになっていたと思うと、ぞっとしました。

当時、小園では、五十五戸ほどあった家も、この地震により、五、六戸ほど残っただけであった。

その年の暮ごろ、学校の唱歌として、「関東大震災の唄」が出来て歌ったものです。

「関東大震災の唄」

1 天に自然の道理あり

自然は人を制すれど

人は天地の霊にして

自然の道理に基きて

人に天賦の御霊あり

人また自然を制すなり

天理を照す光あり

進みて止まぬ力あり

2 時しも大正十二年

大地にわかによるぎ出し

家は破壊し人つぶれ

世の破滅かと思われて

九月一日正午頃

縦又横に揺ぶれて

山は崩れて土地は裂け

人に生きたる心地なし

3

忽ち四方に大火焔

上ると見れば木枯しの

秋の木の葉を巻く如く

燃え広がりにすさまじく

炎々天に張りて

地は火の海となり果てて

阿鼻焦熱の生地獄

無残死傷者數十万

4

自然の猛威をふるう時

人の力の衰れさよ

東西文化のほこりにて

盛大繁華を極めたる

帝都を空しく天災に

焼野の原の白煙り

消えてはかなき大廃虚

秋月寒く照すなり

5

都邑忽ち崩るとも

巨富の財宝焼くるとも

十万精霊死するとも

七千万の国民の

真劍魂ある限り

この災を幸いに

替うるに何ぞ難からん

真劍真劍真劍よ

6 此の天譴を省り見て

華美享樂をいましめて

一国こぞって節儉し

復興なんぞ難からん

国民すべて目を覚まし

万民もろとも勤儉し

勇猛専心励みなば

勤儉勤儉勤儉よ

7 人の心の奥底に

死線を越えたる罹災者を

万国民も一斉に

神に報いのあるべきや

愛の湧き出る泉あり

救わん者と同胞も

再備の奉仕を捧げたる

貢献貢献貢献よ

8 三千年來光輝ある

神のみいつの其の元に

互助共栄を心とし

御国に力を捧げよう

我が皇国は天照す

挙国一致に守る国

我利我利思想を改めて

真剣勤儉貢献よ

提 供 者

寺尾釜田 二一四一三

笠間 ウ メ さ ん

地震に弱い典型的な造り

栗原良夫

当時の家の造りは、草ぶき屋根で、部屋の配置は、田の字形、土台は玉石に柱を載せただけで、柱の数が少く、屋根が重いという地震に対して非常に弱い典型であった。私が震災にあったのは、昼どきで、すでに食事もほとんど終っていた時である。

突然、家が揺れ出して、表に一番近かった兄弟が素足で外に飛び出した。私は二度目の揺れで、母屋が倒壊して、この中からはい出して外に出た。又、逃げ遅れた他の姉妹は、幸い、倒れて来た食器棚の中に入ってしまったので、一命をとりとめた。

この地震の教訓として、デマに注意、それと火災は絶対ださなことです。

俵が母の命を救った

金子ヤオ

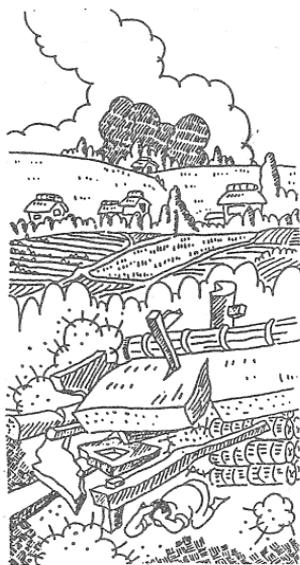
あれは、私が、尋常小学校三年生の時でした。当時、私の家は、蓼川の中分（現在の厚木基地の一角）というところであって、学校から、帰って来て昼食をとり従姉妹と二人で

家の中で遊んでいたら、ガタガタと音がして、父親が、早く外に出た方がいいというので、私達は表に飛び出しました。私の家は、近所でも大きい方でしたが、表で見ていると壁が、バタバタと落ちると、それに続いて、見る間に、家がつぶれてしまいました。

母親は、この地震のため、つぶれた家の下敷になってしまいました。奇跡的に助かり軽傷ですみました。それは、父親が家の中に俵を積む際、崩れない様に、竹の棒を二本渡し、この上に積んで、又、竹の棒を渡し、同じ様に積んでいくという風に、工夫をこらして積んでおいたため、地震で崩れず、なおかつ、母家が倒壊して、はりが落ちて来た時に、積んである俵の脇に身を潜めていた母親は、俵のおかげで、はりに直撃されずに命びろいをしたのでした。

又、今でこそ、蓼川は地盤が硬いということ、知っていますが、その頃は小さかったし、そんなことは知りませんでした。

地盤が硬かったと証明するかの様に、当時、百戸近くあった近所の家の中で、私の家だけ倒れたのみで、他の家は皆、無事であった。私の家は、震災にあう、少こし前に麦わら屋根を厚く葺き替えただけだったので重すぎて地震に耐えられなかった。



うすが物置から転がって来た

佐藤 トク

私が、尋常小学校を卒業した年で、ちょうど昼寝の時間で、奥の部屋で寝ていました。

母親は、養蚕の桑くれをしていたと記憶しています。この時、「ドスン」という、ものすごい音がしたので外に出たら、物置の中の、もちつきうすが、転がり出て来た。私は外には出たものの立ってはいられず、そのうすの傍で、ほう様な格好で治まるのを待っていました。これが地震だとは、この時点ではわからず後になり、はじめてわかったので。

当時、私の家には、八十才になる、おばあさんがいて、この地震で、つぶれた家の軒下で、おばあさんの体半分が、家の下敷になった様に見えましたが、幸いつぶれた家の間隙の中にいたため無事でありました。家も物置も壊れ、井戸も壊れた母家の中にあつたため汚染され、味そ、しょう油、米までが使用出来なくなりました。目久尻川に掛っていた橋もほとんど落ちてしまい農作業するのに大変不自由しました。

このころは、どこの家も貧しく、この震災で家が壊れたため、仮小屋を造るのに近所と協力し、食糧は、水と梅ぼしの交換、味そと米との引替えなどで、当分の間はしのいだものです。

私は、この教訓を生かし、今でも空ビンが出ると、これに水を一ぱい入れておきます。

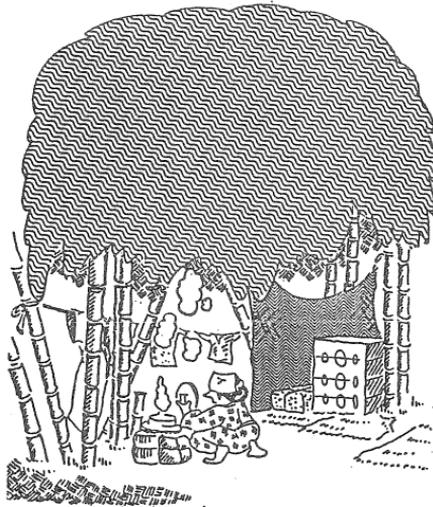
一週間の竹やぶ生活

榎 本 三 郎

「ドン」という音がして、それから立ち木が、「サー」と音をたてた。昼食後、昼寝を
して、うとうととしていた時である。

突然の地震でびっくりしていたら、父親が「外に出て庭の堆肥の上に乗れ」と怒鳴ったのでやっとの思いで堆肥置場にたどりついた。逃げ遅れたおばあさんは父がはいずつて行って外に連れ出した。土手に植えてあった太い松の木三本が、倒れて近所の母家をつぶしてしまった。一週間ほど竹やぶの中で寝た。夜になると、横浜の方の空が火災で真っ赤に見えた。

しばらくすると今度は在日外国人騒ぎが起り、大人達は、デマにまどわされて、村の要



所、要所を竹やりや日本刀を持って固めた。

流言飛語

森山 愿

ちようど、昼食をとっていた時です。「ドカン」と音がして、もっていた茶わんを落と
してしまふほどのすごさであった。弟を脇に抱えて外に出るのがやっとであった。もちの
木につかまって、地震が止むのを待っていた。物置があつたが、盛土であつたため、周囲
との段差が二尺もついでしまつた。

当時、人々の言い伝えから震災は、「七十年に一回はまわってくる」と聞いていた。

又、流言飛語により人々はふりまわされてしまい、何の罪もない人がとんだ災難にあつ
たそうである。それから少したつて災害復旧ということで救済事業に駆り出され、一日八
十銭の報酬を得た。（当時の農家の日当は二十五銭であつた。）

コンクリートの橋が壊れてしまつた

栢 本 竹四郎

関東大震災の時は、尋常小学校六年生でした。昼食を食べていたら、突然「グラ」と来

て、私は竹やぶの中に避難しました。

近所の家では二階建の物置が崩れて、二階部分は小破壊であったため現在もその部分は残っている様です。

目久尻川に掛かっている武者寄橋は、当時、丸太の基礎の上に、コンクリートの片ものを載せてあっただけでした。この震災でコンクリートが割れて橋が用を足さなかつた。

国内から、外国からも救援物資が

早川 明 能

今は冷蔵庫があり、食糧の保存ができるが、当時は、魚、肉等の保存に苦労したものです。生活の知恵で当時は、屋敷の中に穴蔵を作り、今の冷蔵庫の役割をさせていた家もありました。

私の家の近所の女の方は、不幸にも、この穴蔵に生魚を取りに入って、運悪く生き埋めになってしまった。

私の父は、神官であったため、敷地内には、本殿、拝殿、神楽殿があり、このすべてが倒れ、住まいや物置も全壊してしまいました。幸い、本殿は釘等、全て使用していない方

式のいわゆる組立式であつたため、傷みは少なく倒壊後、安外に早く修復出来ました。

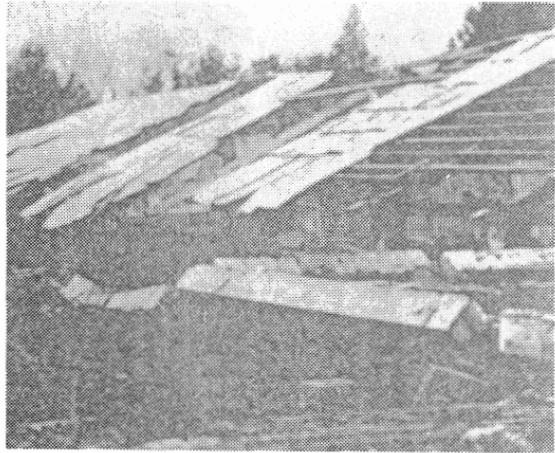
又、この地震で、粉を挽く水車が壊れて、比較的被害の少なかった相模原まで粉挽きに行つたのを記憶しています。

この地震にあつた日より、十日くらい後になつて、大阪をはじめ国内はもとより遠く外国からも救援物資が届いたのを覚えています。

目の前で生徒が校舎の下敷に

鈴木 若雄

尋常小学校の教員になりたてのころであつた。教室で昼食をすませ、昼休みをしていた時のことです。「ガタガタ」と音がして、これは大きな地震だと感じましたので、急いで非常口までは来て外に出ようとしたその瞬間に完全に外に放り出されてしまつていた。近くの神社はつぶれ、学校も裁縫室、小使い室の一部を残して倒壊してしまつた。この時、学校にまだ残っていた高等科の生徒数人が、この下敷となり、そのうちの二、三人は、はい出て来たが、残りの者は、少したつてから救出した。幸いなことにみんな大した怪我人もなく火事も起こらなかつた。自宅に帰ってみると地盤が良かったのか我が家は無事であつた。近所でも川に面していた家は比較的多く倒れていた。食糧には、特に困らなかつた。



又、この地震では、田畑も相当いためつけられ、秋の取り入れは苦勞し、近所とお互いに協力して収護したものです。

(突如として地軸をゆるがし天地を鳴動させて襲来した大地震は、一瞬にして関東一帯の地を業丈の海と化せしめた。

本校は業火にこそ見舞われなかったが、折角前年再築したばかりの新校舎(上写真)を無さんにも倒潰してしまったのである。)

昭和五十五年九月二十日発行

綾瀬小学校八十年史より

ザーという音と大きな横揺れ

内 藤 常 吉

あの時は、蚕の時期で昼の桑を家族の者が与えていた。母は仕事の合間をみて、庭で遊

んでいる私に、昼にしようと言って来た。その時、南の方から「ドロドロ」という音がして、その直後、大風が吹く様な「ザー」という音と大きな横揺れが来て、見る間に地割れが発生した。この間気丈にも父親は、丸太二本をやっとの思いでどこからか持って来て、母家の傾むいた方向に、つかい棒として用いた。私は母親が、「竹やぶに来い」と怒鳴っているのを聞き、我にかえり飛んでいく様に竹やぶに入った。この震災で近くの人が、二人亡くなられ幸い、火事はなかったが、水路は、あちこちで埋まってしまい、目久尻川も流れが変ってしまうほど壊された。母家には、すぐに住まわず自分、竹やぶ暮らしを強いられた。

私どもには、鎌倉に親類があり、そこで連絡をとるため、父親と伯父さんが自転車に乗って様子を見に行ったところ、親類は皆無事であったが、「浜に近い人は逃げる際、津波にのまれた人が何人もいたらしい」と言っていた。

横井戸の水が、ドツと出てきた

内 藤 正 義

十二、三才の時でした。学校から帰って来て、食事を一口、二口食べかけたら突然、ドツと音がして家が揺れだした。すぐに外に飛び出たが、立ってはいられず横井戸の水が

「ドッ」といっきに流れ出て来たかと思うとすぐに井戸の中にもどり、見ているのも怖いぐらいすごかった。

隣の家によるめきながら駆けて行ったら、隣の家はつぶれてしまい自宅にもどったら、自宅も倒れる寸前で、地鳴りの音がすごく倒れた音がわからなかった。

翌、大正十三年一月十五日にも大きな余震があり、この余震で倒れかかっていた近所の家は完全に倒れてしまった。

大正十二年九月一日の地震で母家が倒壊してしまった我が家では、近所の人々が手を貸してくれて、バラックを建て当座は、雨露をしのいだ。

隣の海老名の下今泉では、この地震で火災があり三人の尊い命を失ってしまったそうです。

母親が丹精して作った紫蘇の葉が役にたった

小 泉 勲 司

当時は、伊勢原の日比多に住んでいて、あの震災を体験しました。

その日、平塚と伊勢原の境あたりまで梨を持って行く途中で地震に遭遇した。自転車で出かけたためハンドルをとられ、道路には地割れが発生し立っていられず、じっとしてい

た。近くに兄の家があり、一時治まったのを、見計らって、一時避難した。

地震後、みそ、しょうゆは使えなくなってしまい家では、「柴蘇の葉」を細かくして、びんに詰めておいたので、一週間は塩気に困らなかった。

一週間くらいたつと、どこからか救援物資が届き、衣類をはじめ、塩、みそが届いた。

その頃、家では、アンゴラうさを飼っていて、地震のおきる十日ほど前から、そのうさぎの耳が、まっすぐに立っており、小屋の中を駆け回り異状な様相を呈していた。あれが前兆現象であったのか今思うと不思議です。

地震前兆と考えられている現象のいろいろ

地殻変動	……上下、水平変動、伸縮、傾斜、重力等
地震活動	……空白域、前震、地震波速度変化、発電機構等
電磁氣的現象	……地磁氣、地電流、比抵抗、電磁波等
地下	……水位、水質・水温等
地下ガス	……ラドン、水素、ヘリウム等
氣象学的現象	……雲、虹、気圧配置等
生理学的現象	……動物行動、植物電位等

土ほこりで周囲が何も見えなかった

加藤 一由

耳が裂ける様な、大きな音が「ドーン」として、そのうち「ドロドロ」という音とともに激しい揺れが来た。もう意識をなくすかと思うほどのすごかった。ちょうど、一家そろって食事場で昼食をしていたところであった。まともには立っていられず、はいつくばる様な格好で、裏側に飛び出した。家の者は、揺れが弱くなったのを見計らって外に出たそうである。土壁は全部落ちて、ほこりで周囲が見えないほどすごい揺れであったが、幸い家は倒れなかった。

山根の方では、おばあさんが外に出ようとして倒れて来た軒が首にあたり、亡くなられたそうである。又、近くに小さな川が三本あったが、ほとんど原形をとどめず埋まってしまい、道路は切れざれになり田の中に押されてしまった。竹やぶの中でそれぞれに布団を持ち出し蚊帳を吊り、食糧は持ちより分けあって集団生活をした。

おばあさんを先に助けるかそれとも馬が先か

加藤 徳次

中学校二年生の時です。家族とともに家の中になると、ゴーという音とともに、家が舟

の上にいる様に左右に揺れて立っていられなかった。そのうち、家の土壁がバラバラと落ちて来て、外に出ようと思ったが、なかなか出られず、やっどのおもいで外に出ると、庭の木が大きく揺れ木が地に着く様に見えた。地震が一時治まってよく周囲を見回すと、母家は倒れなかったが、物置は倒れた。

近所では、馬を飼っていたが、その馬と、おばあさんが、家の下敷になっただけだ。おばあさんを先に助けだすか馬を先に助けるか、迷ったなどと、後になって笑い話になったというエピソードもあった。

この地震の二、三日後に、在日外国人騒ぎがあったが、江ノ島では、「江の島にかかっている大橋が津波で押し流されてしまい、はては「江ノ島がなくなってしまう」等といううわさが流れて来た。橋が流されたのは事実であつたが江の島はなんともなかった。とかく人間はデマにまどわされやす



いものである。

地震の起こる一週間前に江ノ島の片瀬に深海魚があがったと聞きましたが、前兆現象であつたのか不思議です。

私は、この地震の体験から、教訓として、まずあわてないこと、細かく対策を練らないこと、なぜかという、瞬間的に来る地震に対して、あまり細かな対策をしておいても結局、何も出来ないのが実情だと思います。しかし食糧、水、塩等は事前に貯えておくのは必要であると思う。

おばあさんが火の始末をしてくれた

鶴野精 一

その日は、土曜日だったので午前中に学校から帰って、コンロで茶を沸かしていたところ大きく揺れが来たので、ひとしきり大黒柱に捕まっていた。しかし土壁が落ちて来て、とても痛くてたまらず、やっとの思いで外に出た。おばあさんも母親も外に出たが、おばあさんが出てくる前に、コンロの火をやかんの中の湯で消して来てくれたので火災にはならずにすみました。

この地震で庭は裂けて、竹やぶもろとも川に滑り落ちてしまい、いくつあつた物置も

つぶれてしまった。崩れた庭の土と竹で川に堰ができて、そこから溢れた水が削り取られた庭に逆流してきて、庭が池の様になってしまった。特にこの辺は水の被害が目についた。

大きな揺れで転がされ

志 澤 定 八

大正十二年九月一日は、朝から大雨で、十時ころから急に晴れて蒸し暑い日でした。

当時、私は十五才で尋常高等小学校二年生、学校からの帰り道の浅間森（現在の中央公民館南の堆肥センター）付近で、ドドドーという大きな音とともに縦揺れがあり続いて横揺れが始まりました。揺れは強くなったり弱くなったりして、横揺れの際、一緒に下校中の四人のうち一人か二人が大きく揺れた時に転がされてしまい、他の子も付近の桑の木に捕まっていないと立っていられなかった。

家に着くと養蚕をしていたので家族の者が、つぶれた家の上から炉があった付近に見当をつけて、井戸から水を何回も運んでかけたことを覚えています。

地震後は、近所四軒で私の家の入口の竹やぶに集まり、井戸水を使い、米を持ち寄り、それについて食べ何日かはそこで生活していた。

この後、何日かは相当大きい地震がありました。ある程度地震が治まると、家の片付をしてつづれた家の屋根裏（養蚕に使用していた）で生活した。

「その火を消せ」とさけんだ祖父

橋 本 峰 雄

父親ともちをついていたところ、突然揺れが来て、母家の土台が、ドスンドスンという音をたてた。そのうち庭に二尺ほどの地割れが出来て道ぞいに長く続いた。もち米を蒸していたので火を焚いていたが、「その火を消せ」と大声でさけんだ祖父の言葉で急いで消火した。近所では山の斜面が崩れて道が埋まってしまった。

この地震で、用田橋の近くのおじいさんは、横浜の娘さんの家に遊びに行っていて、行方がわからなくなってしまうたそうです。

家は倒れなかったが、余震が続き怖いので竹やぶの中に仮小屋を造り半月ほどそこで過ごした。食糧の心配はなかったが、灯油がなくなり「どこどこにある」と人づてに聞くとどんなに遠くても買いに出かけた。

教訓として、水の確保はもとより停電によりロウソク等を用意しておくべきだと思う。

目の前に女の人が落ちてきた

橋 本 惟 恭

朝のうち降っていた雨も、学校に着いたころにはあがり、その日は学校も半日で、仲間と一緒に帰路を急いでいた。今の農協の堆肥センター付近に来た時でした。ゴーと音がしてくると思うと揺れがきて立っていられずはっていた。その時、すぐ目の前の家の二階から女の人が落ちて来た。その女の人は不幸にも亡くなられてしまった。

どうやら地震が治まり、帰り道を急いで芝原を過ぎ佐要法塚まで来ると、海老名の有馬の学校が燃えているのが見えた。又、道路はひび割れがすごく、そこをまたいで家路を急いだ。当時は山が多く、あちこちの山が崩れた。

私の家では竹やぶの中に井戸があったためか多少濁った程度でどうやら使用できた。

又、食糧にもさほど困らなかった。

しばらくすると在日外国人騒ぎがあり、父親たちが竹やりを持って警戒していたが何もなかった。よそではたまたま通りかかった人が在日外国人とまちがわれて、とんだ災難にあつたそうです。

現代は、生活様式が当時とはだいぶ変わってきており、「電気、ガス、水道がストップしたら……食糧の備えは」と思うと心配です。

神社の石段が燈ろうが崩れた

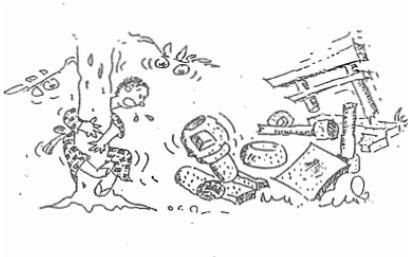
岡本 旭

当時私は熊野神社の近くに住んでいまして、七才の時でした。

この日は朝方から大雨が降り、昼前にあがりよく晴れて蒸し暑かった。ちょうど土曜日でしたので学校を午前中であがり昼食をして休んでいた時のことでありました。突然の地震で立ってはいられず、四つんばいになり、やっとの思いで柿の木に捕まった。一回目の強い揺れで母家がつぶれ、二回目の揺れで蔵がつぶされた。

母親は畑に行っていたが無事であった。

神社の石段が崩れ、四ヶ所にそれぞれあった燈ろうが全部倒れた。井戸水は使えず、川の水を沸かして飲んだ。



横浜にある親類では一家全員亡くなっていた

浅田太郎

ちょうど現在の落合にある細谷自動車付近で、突然あの地震に遭遇しました。高等科二年生の時のことで、学校の帰りの途中でした。激しい揺れに立っていられず、四つんばいになりながら、周囲を見回すと、建物二、三棟がほとんど同時に倒れ、すぐ前の蔵も一っきに崩れてしまった。道ぞいにある土手の木が倒れて道をふさぎ、またぎながら通ったのを記憶している。夢中で家にたどりついたが自宅の物置は全壊し母家は、かなり傾いていたが倒れてはいなかった。この付近は、十軒に一軒の割合で母家が全壊した程度だったと思います。

私の家の親類が横浜にあり、ここではこの震災のため全員亡くなっていた。何日くらいたったか救援物資が届いた。

水車小屋が壊れてしまった

細谷英雄

近所の友達と一緒に地藏橋（今の松山橋）の上で遊んでいた。丸太二本を渡しそれに、ひらものを張っただけの橋であった。この上で突然、上下に振られ、つづいて横に揺られはいつって自宅にもどった。物置、小屋がつぶされたが母家は無事であった。

人の話で「川の水が大波をうっていた。」というのを聞いた。
食糧には困らなかったが、中川橋の上にあった水車小屋が壊れてしまいうすで白米にして食べた。

二、三日するとデマ騒ぎがあり、それは大変であった。大人はそれぞれに竹やりや刀を持って要所、要所を固めたものである。

のこぎり一つで人命救助

新倉喜作

自宅で弟妹の面倒をみながら一緒に食事をしていて、両親は養蚕の仕事をしていた。

その時であつた突然、「ミシミシ」と家全体が音をたて、グラグラグラときた。一番先に私は外に出た。母親が「上下動だから大きいぞ、外に出ろ」と言ったのを覚えています。弟妹達は逃げ遅れ父親と母親がその上に覆いかぶさる様にして土間に伏した。家は倒れなかつたが傾いてしまつた。

翌年正月十五日の余震で倒れかけていた蔵がつぶれてしまつた。前年の震災で両隣の家がつぶれその下に人がいるということで、どちらを先に助けるか迷っていたら、南側の人は、すぐ出て来たが、北側の人は倒れてきた家の柱の下敷になり、私の父親がのこぎりで柱を切つて助け出した。

一週間くらいは竹やぶの中で暮らし、その間、傾いていた家は起こして元に戻した。

学校は全壊してしまい、しばらくは神社の近くの山の中で授業を受けた。机やいすは、壊れた校舎からひきずり出してきて使用した。しばらくは、そんな授業をしていてその後校庭にバラックを建てて勉強をした。

地震の発生前に、東の空に大きな入道雲が見えた。

余震の方が怖い

鈴木照作

尋常小学校四年生の時で、学校の帰りに今の細谷自動車付近を歩いていると、突然揺れが来て歩けず、はいずる様に道路を自宅に向かって進んだ。途中で自分の家は倒れてしまったのかと思いつつ、の思いで家に着くと自宅は半壊していた。

藤沢の遠藤に親類があったが、この地震と翌年の一月十五日の余震により二度とも倒壊してしまった。余震がはっきりなしに来るので竹やぶの中で十日間ほど暮らした。

余震

大地震が起こると、引続き多数の地震が発生することがあり、ときには一日数百回に達することがある。また、二年、三年と長期にわたり継続することもある。

このように大地震が続いて起こる地震を本震に対して「余震」という。

余震は大地震の場合、破壊力が大きいので一回の破壊だけではおさまらず、安定状態になるために小破壊が続いて起こるためと考えられている。

余震は本震より規模は小さいものであるが、

(1) マグニチュード八クラスの大地震の場合、余震の大きさもマグニチュード七クラスになることがある。

(2) 本震で壊れかかった建物、ガケなどが余震でとどめをさされ崩壊することがある。

消大地震対策より

地盤が固かったので家はつぶれなかった

峰 尾 清 隆

たまたま掃除当番で学校に残っていて、友人四人で帰ってくる途中の道で地震にあってしまいました。「ドカーン」という音とと共に、強い揺れが来たので道ばたの桑の木にかじりついていました。怖いのと自宅がどうなったかと心配で帰路を急いだが余震で思う様に歩けず、しばらくすると自宅手前の竹やぶの中に大勢の人が避難しており、この中にいた人達が、「今歩くのはあぶないからこっちに一緒にいなさい」と大声で言われたので余震が治まるまで竹やぶの中に入れてもらった。

この辺は地盤が固いせいかわチャンコにつぶれた家はなかった。

しばらくすると、私の家の前の道路を焼き出された人々が横浜方面から大勢歩いて来た。

火を消すために逃げ遅れたお手伝いさん

近藤 俊平

尋常高等学校一年生の時に、あの大地震にあつたわけです。

その日、学校は半日で家に帰って来て一人で昼食をとっていました。その当時私の家では大勢の人が働きに来ており、その時はみんな仕事をしていたと思います。私は食事をして、お茶を飲んでいたところ突然に揺れ出しやつのことで外に出たのですが、あわてていたためどぶの中に落ちてしまったのです。縁木に捕まり揺れる中で外にはいざり出しました。土蔵の壁は、すべて崩れ落ちその土ぼこりで火事の様でした。又、いくつかの蔵はつぶれてしまつた。

母家の中にかまどがあり、この中の火を消すために、お手伝いの方が逃げ遅れ、可愛想につぶれた家の下敷となり亡くなってしまつた。

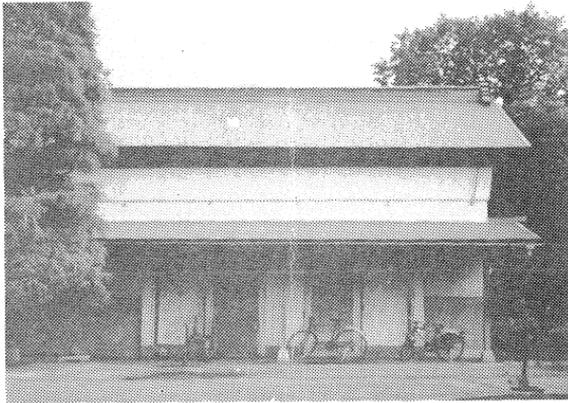
私の通っていた小学校はこの地震の前に火災で全焼し、建て直してから半年もたたないうちに、この震災でつぶれてしまつた。

又、私の家の近所では、下級生が自宅の蚕室に入っていてつぶされ、亡くなってしまつた。

この地震により母家がつぶれ、さっそく住まいに困つたので、自宅南側の竹やぶに蚊帳

を吊り、布団を持ちこんで、しばらく暮した。そのうち役場を通じて配給を受けたことを覚えてる。

この地震から受けた教訓として、昔の家屋は屋根材が重く、そのわりに柱が少なかったため、バランスが悪く倒れやすかったのではないかと思う。やはり軽い材料の屋根で葺くに限る。



明治時代に建造されたという近藤俊平さん宅の土蔵ですが関東大地震の時にいくつかあった土蔵のうち、この土蔵だけが無事であったとのこと。数度の修復を経て、現在にいらっています。

何事が起きてても常に冷静に対処

橋川 勇

最初に左右に大きく揺れて、「ドシン」ときて、たまたま家に来ていたお客さんがその音を聞いて「たつ巻」だと叫んでいたのも外に出ないでいた。すると今度は上下動に変わったので外へ飛び出し麦わらの積んであるところにいき飛び乗った。まわりを見ていると両隣の土蔵が土けむりをあげていて火事の様であった。私の家は倒れなかったが、近所では養蚕をするのに使う火ばちの火を消しにいったおばさんが家の下敷となり火ばちの火でやけどを負った。

近所では、学校から帰って家の中にいた子供がつぶされ亡くなってしまった。寺尾地区には大きな地われはなかった。

今とはちがいが情報が少なくそれを止しく伝達する機関がなかったためデマが飛びかい人々はデマにしばしほんろうされた。

教訓としてやはり大災害に備えふだんから心身の動揺を、おさえることを自らに心がけておくとともに非常携帯品の用意をしておくべきです。

大黒柱に身を寄せて

笠 間 ウ メ

尋常小学校四年生の時でした。母親は産後十日ほどであったため、学校から帰って来て昼食の仕度をしていた。この時、突然「ゴト」という音がして揺れだったので急いで消火して庭に飛び出した。今でこそ地震があったらすぐ消火とさげばれていますが、あの時、自分がそれに気がついたのが不思議である。

庭に飛び出したものの転ろげ回されていた。母親は赤児をかかえ、おばあさん達と大黒柱の下で身を寄せていた。(大黒柱の下は安全であると当時、言われていた。)

自宅は倒れなかったが一部は沈んでしまいました。巾二メートル、長さ五十メートルの地われができて母家の下をはしった。この近所では十二戸くらい民家があったが、全壊したのは六、七軒で残りは半壊であった。当分のあいだ竹やぶの中で両隣一緒に暮した。

慌てて庭に飛び出したが

早川角治

学校から家に帰り食事をとるばかりになっていたが、家の縁側でトウモロコシをかじっていた。「グラ」と来たかと思うと「ガタガタ」と家が揺れ慌てて縁側から庭に飛び出した。庭の中で捕まるものもなく転がされていた。間一髪で、母家をはじめ他の二棟の建物もつぶされてしまった。この近所では九割の家が倒壊し、八軒の家族が下の竹やぶの中で暮らした。

今では隣り同士のつきあいがあまりないが、昔は隣り同士助けあったものです。

妹と山茶花の木に身を寄せて

橘川敏

大震災にあったのは、私が一六才の時、ちょうど食事の前で蚕に桑をくれている時でした。

突然、木が「ザーザー」と音をたてて揺れてきたので、すぐ下の妹と二人で山茶花の木

に捕まっていた。もう一人の妹は、両親と地震が少し治まってから外に出て来た。幸いなことに母家はつぶされなかったため、怪我は誰もしなかった。母家はつぶされはしなかったものの半壊していたので、雨しのぎのバラックを造り、その後、母家に筋交いや、突支い棒をして補修し生活できる様にした。

ひばの木に捕まって

増田 虎

朝から降っていた雨もあがり、大変蒸し暑い日で学校から帰り、食事をとろうと家に入りかけたその時でありました。

家の南の方から突然「ゴー」というものすごい音が聞こえてきたかとおもうと同時に、強い揺れが来た。庭に放り出される様に転ろがされていると、父がひばの木の方から「こっちへこい」と大声で呼んでいるので、その木に捕まり様子をみていた。母は二人の妹をかかえて外に出てきたが、庭で転ろがされていた。母家は傾いただけでしたが、十坪の物は置は倒されてしまった。

十月には傾いた家を手を呼んで起こした。

昭和十七年に家を移転した時に家の下から関東大震災の時できた地われが巾一尺で南北

にはしっているのが残っていた。

あの地震の二、三日後から在日外国人騒ぎがあり、大人達があちこちに竹やりを持って立っていて不気味であった。結局、デマであったことが後になってわかったが、とかく世の中が混乱している時に流言飛語にまどわされるものです。

私の家では、米を購入するのに少なくとも常に二十キログラムを切らないうちに留め買いをして、いざという時に備えています。

関東大震災（大正十二年九月一日）綾瀬村被害状況

人口 六、〇六八
戸数 九二四

（大正十二年震災時）

被害状況

住宅被害

全壊 四六三戸
半壊 二七三戸

住宅以外（物置、蔵等）の被害

全壊 八六〇戸
半壊 三七七戸

人的被害

死者 一六人
負傷者 五八人

日本における主な被害地震

年月日 (日本暦)	マグニ チュー ド M	地 域	被 害 の 概 要
1923 大正 12. 9. 1	7.9 (7.8)	関東南部	関東大地震 死 99,331人、行方不明 43,476人、家屋全壊 128,266、半壊 126,233
1930 昭和 5. 11. 26	7.0	伊豆北部	北伊豆地震 2～5月伊東地震震群。11日より前震があった。余震多く、死 272人、家屋全壊 2,165、山くずれ、崖くずれが多く、丹那断層(長さ35km、横ずれ最大2～3m)と、直交する姫之湯断層を生じた。
1948 昭和 23. 6. 28	7.3	福井平野	福井地震 被害は福井平野およびその付近に限られ、死 3,895人、家屋倒壊 35,420、半壊 11,449、焼失 3,691。南北に地割れの連続としての断層(延長約 25 km)
1964 昭和 39. 6. 16	7.5	新潟県沖 粟島付近	新潟地震 新潟、秋田、山形の各県に被害があり、死者 26人、家屋全壊 1,960
1968 昭和 43. 5. 16	7.9	十勝沖	1968年十勝沖地震 青森を中心に北海道南部、東北地方に被害、死者 49人、不明 3人、傷 330人、建物全壊 673
1974 昭和 49. 5. 9	6.9	伊豆半島沖	1974年伊豆半島沖地震 伊豆半島南端に被害。死・不明 29人、傷 78人、家屋全壊 46
1978 昭和 53. 1. 14	7.0	伊豆大島 近海	1978年伊豆大島近海地震 死 25、傷 139
1978 昭和 53. 6. 12	7.4	宮城県沖	1978年宮城県沖地震 被害は宮城県に多く、全体で死 27、傷 1,227、建物全壊 651
1983 昭和 58. 5. 26	7.7	秋田県及び 青森県沖	昭和58年(1983年)日本海中部地震 死者 104人、負傷者 324人、家屋等; 全壊 1,584棟

参 考 文 献

- 復刻版 神奈川県震災誌
 - 地震のはなし
- 神奈川県新聞社
神奈川県

編 集 後 記

この冊子は、関東大地震発生当時七歳以上で綾瀬市内域（一部他市で体験された人も含まれています。）で地震を体験した綾瀬市民の中から職員が訪問して体験を聴取し、まとめたものです。

昭和六十二年九月発行

編集
発行

綾瀬市消防本部防災係
綾瀬市深谷三八五〇―二

印刷
昭英印刷株式会社